

高校野球部員におけるコンフリクトへの対処行動に関する研究

スポーツ経営組織学ゼミナール 1214128 林 豪紀

1. 研究動機・研究目的

日本の少子化が進み少年野球人口の減少やスポーツの多種目化などでしている中で、平成 29 年度の高校野球連盟に登録している部員数は 161,573 人と依然として高校野球は高い人気を誇っている。しかし、その一方で現役の高校野球部員の間では、部員の暴力事件や刑事事件等を起こし、学校や高野連が謝罪や釈明に追われるような問題が取り上げられることも少なくない。このような問題から高校野球を教育の一環として考え直し、生徒自らが自主性を育み、平和で民主的な人類社会の形成者として必要な資質を備えた人間の育成が求められている。

そこで本研究では、高校野球の教育的意義を考え、チームスポーツであり部活動内での人間関係や指導者との関係が多くあるという観点から、人間関係と大きく関係を持つコンフリクトに着目する。高校野球部の指導者が部員または野球部組織全体への組織マネジメントの一助となるよう、高校野球部員の中に存在するコンフリクトを明らかにし、またそのコンフリクトへの対処行動について考えた。

2. 研究方法

質問紙調査及び、その質問紙調査から得られた情報を基とする 1 対 1 の半構造化インタビュー調査を行なった。また、インタビューを行う際には対象者の自然な語りを引き出すため、会話形式でインタビューを実施し、一人当たり 30 分から 50 分の時間を要した。

本研究では 8 名の現役高校野球部員を対象に半構造化インタビューによりデータを収集し、KJ 法におけるグループ編成の手法を用い分析を行った。グループ編成後、表札の空間配置と図解化の手順による、A 型図解を行なった。まず、ラベルを適切に配置しその後、それぞれの関係性を矢印などで示し、高校野球部員におけるコンフリクトへの対処行動の分類を A 型図解として示した。

3. 主な結果と考察

高校野球部員に見受けられるコンフリクトの種類として、「指導者（監督、コーチ、教員等）に対するコンフリクト」と、「部員間に存在するコンフリクト」の大きく 2 つに分類できる。「指導者（監督、コーチ、教員等）に対するコンフリクト」については主に①指導者同士の意見の食い違い、②指導方法の 2 つが挙げられる。①指導者同士の意見の食

い違いについては、「監督とコーチで指導方法など言っていることがちがう。」など、指導者同士の意思疎通ができていないために、部員が反発を覚える発言があった。これはその部員個人のコンフリクトだけにとどまらず、部員全体としてのコンフリクトに発展する可能性が大いにあると考えられる。指導者同士の意思疎通ができていないこともコンフリクトの要因の一つであるが、指導者と部員のコミュニケーションでそのコンフリクトに対処ができるとも考えられる。部員が指導者に意見が食い違っていることを発言できるか。また、指導者が普段から部員とコミュニケーションをとり、発言しやすい関係を築けるかといった関係性の問題とも考えられる。②指導方法については、この指導方法は高校野球部員の組織としてよりも部員個人と指導者に起こるコンフリクトと考えて良い。しかし、この指導者に対するコンフリクトは、部員の一方的な不満の意見が多く、絶対的な立場にある指導者の場合、認知していないことが考えられる。

指導者に対する対処行動は、多くが「協調」であり、指導者と選手が風通しの良いと「適応」を示すこともある。部員間同士の対処行動では、「競争」、「協調」「回避」、「適応」をとるが多くの場合、「回避」を示した。

4. 結論

- 1) 高校野球部員におけるコンフリクトとその対処行動は、①指導者、②部員間の2つのコンフリクトに対し、③競争、④協調、⑤回避、⑥適応の4つの対処行動が存在する。
- 2) 高校野球部員は監督やコーチといった指導者に対して、④協調の対処行動を示しやすい。
- 3) 高校野球部員は部員同士のコンフリクトに対して、③競争、④協調、⑤回避、⑥適応の対処行動を示すが、⑤回避の対処行動を示すことが多い。

5. 卒業論文の執筆を終えて

論文の執筆にあたっては、お忙しい中多くのご指導をいただきました水野基樹先生を中心に快くインタビューに協力して下さった皆様、各高校関係者の皆様、インタビュー対象に当たる知人を紹介していただきました順天堂大学硬式野球部の方々に心から感謝申し上げます。